

自閉症のこだわり行動による生活困難性への支援のあり方 —福祉専門職と母親の支援内容についてのエピソード分析—

柳沢 ゆかり*・綿 祐二**

本研究は、自閉症児・者のこだわり行動の支援ではなく、こだわり行動による生活困難な状態にある自閉症児・者の生活支援に視点を置いた。生活困難な状態になっている自閉症児・者に対してどのような支援をすることで、生活の困難性を軽減させることができるのか、支援内容について検討する必要があると考える。

調査結果から、①「こだわり行動」と「支援」という繰り返しによる対処的支援の傾向、②支援における強制的な介入と利用者本位、③誰のための支援なのかという視点が浮かび上がった。見通しが立てにくいこだわり行動の支援は、支援者を不安にさせ、その場限りの支援になってしまう傾向がうかがえた。それによって誰のための支援なのか、困難を抱えて生活しているのは誰なのかを確認しながら支援を行う必要が出てくる。また母親による支援と福祉専門職の支援については“自閉症児・者に対する支援の合理性”について考える必要も出てくる。

そして、家族と専門職の支援の特徴、支援の視点の違いについても明らかになった。支援者、環境、状況、前後の生活状況、感情などによってこだわり行動からどのような困難性が表れてくるか、また何が異なっているのがエピソードから見えてきた。支援者の支援内容として自閉症、こだわり行動の知識、こだわり行動を支援する意味、生活支援をする意識など、支援者の考えにより、自閉症児・者の生活にどれだけの影響を及ぼしているのかを認識することができた。

Key Words : 自閉症, こだわり行動, 生活困難性, 生活支援

* 聴講生

** 人間学部人間福祉学科

1、問題の所在

自閉症の特徴的行動である、こだわり行動は、社会に適應することができない行動障害（不適応行動）であるとの研究が多く出ている。また、“その場の状況や事柄と同一性を保ちたいという感情が先立ってしまうということからくる行為である”という報告もなされている。自閉症は“对人的相互反応における質的な障害”、“コミュニケーションの質的な障害”、“行動、興味、および活動の限定された反復的で常同的な様式”といった特徴をみせ、感覚の過敏性や活動への見通しが持てないための不安から、社会的不適応な行動をとってしまう障害といわれている。M.ラター、V.M.デウランドらの研究によると、自閉症児の不適応行動は、「感覚要因」、「逃避要因」、「注目要求」、「物的要求」に分類され、その行動自体が「コミュニケーション行動」であることが考えられるという報告も出されている。つまり、自閉症児・者のコミュニケーション行動が、一般的に考えられている社会的な行動として、社会的に認められないがために、不適応行動として扱われてしまっているということになると推測できる。

また、「人との相互的な理解と交流を得ることができずに、容易に自分の世界に引き込まれてしまうため、人からの圧力を受けやすくなり、それを防御するために独自の自己保全術を身につけていくことで、周囲からの叱責を招いてしまう。」ということも起きるということが述べられている（石井1993）。自閉症児・者と周囲の人との関係性が自閉症独特な行動パターンを組み立てていっていることがここから言える。

川瀬（2007）は、「自閉症は大人になったらどのような生活を送るのだろうか。成人期以降、対人関係に発達は見られるのか、どのような発達の経過をたどるのだろうか。特に青年期に強度行動障害という著しい不適応行動を見せた場合、その後環境への適應を見せていくことはできるのだろうか。」と述べており、青年期以降の入所施設での生活実態について困難性を抱えているという研究報告も出されている。

成人期にこだわり行動に変化が見られたり、行動の特徴が別人のようになつたりすることがあるという報告も出ており（金井1997）、成人期になってからも成長はあると考えられる。施設において自閉症児・者に対し、生活を充実したものにしよという考えから、さまざまな活動を行いながら、毎日の生活を過ごしている現場が多いと考えられるが、その生活の中で、自閉症児・者が上手にできた経験を興味のあるものと安易に結びつけてしまう傾向や、それを本人のやりがいある活動と置いてしまう傾向もある。状況、周囲の存在、季節、日程などによって行動が異なる自閉症の支援は困難が多いと考えられるが、細かな視点に配慮しながら生活支援をすることで、成長する変化も見極めることができるのではないかと見える。

こだわり行動を軽減させる研究、児童期の自閉症に影響する研究はとて多く報告されているが、成人期以降の自閉症者にとっての具体的な支援方法を述べた研究は多くない。自閉症のこだわり行動の独特な行動、膨大な行動パターンそして、要因やこだわり行動が影響していることを解明していくことは容易にできることではないということが推測できる。こだわり行動

を抑えて止めようとしても逆効果が生まれることもあり、行動を止めてしまうことで、周囲の人からは考えられないような強い不安を与えてしまう可能性もある。一つのこだわり行動をやめさせても、また新たなこだわり行動が発生してしまうこともある。自閉症児・者はその行動によって気持ちを安定させ生活しているかもしれない、そのこだわり行動が生活のリズムを作っている重要な要素とも推測できる。そこで、自閉症の特徴的な行動自体にばかり焦点を合わせる考えではなく、その行動に注意を払っている支援側の立場から、こだわり行動の生活の困難性に着目していくことが重要ではないだろうか。支援がどのような意味を持っているのか検討する必要がある。

自閉症施設実態調査（2006）では、自閉症の生きづらさや支援のしづらさを“大変”と表現している。その大変さの1つに「自閉症児・者に療育の支援（支援の思い）が届かないまま、周りの環境との齟齬が大きくなっていくときの“大変”さがある。自傷、他害、こだわりなどの問題行動がどんどん強まりながらも、そこに療育の支援が届かず、その人の生活や人生が振り回され、周りもそれに巻き込まれる。多くの施設でどうしていいのか分からないままになっている支援の中で、自閉症があげられている。」と述べられており、どのように支援をしたらいいのかわからない、支援している側が、いつの間にか巻き込まれ、自閉症の行動が、支援前よりもエスカレートしてしまう。自閉症者は、余計に混乱してしまうということがいえるのではないだろうか。このことから支援の重要性が読み取れる。

こだわり行動自体が社会の不適応行動に結び付いているわけではなく、支援者がこだわりをどのように捉えていたかが、社会に適応しない行動表現の要因となってしまっているということが考えられる。つまり、こだわり行動による生活の困難性に焦点を当てた生活支援が求められてくる。

それでは、支援者はどのような意識の中で、自閉症児・者と関わりを持っているのだろうか。さまざまな研究報告で、自閉症児のこだわり行動、問題行動の代替行動の研究、こだわり行動を示す自閉症児への教育課程に関する研究などが多くみられ、こだわり行動の支援にはさまざまな課題があげられていることが分かる。

では、自閉症の中でも、「こだわり行動」に焦点を当て、自閉症児・者の行動分析という視点ではなく、支援側の支援の中身を探っていくことで、自閉症児・者の生活に大きく影響してくると考えられる。そのため、細かく現状を把握していく必要があるのではないだろうか。

生活全体を見ながらの支援から、その対象者自身が生活を将来に継続させていけるような体制を整えていく支援も同時に考えていかなければいけない。たとえば、障害から生じる行動について考えていく時に、行動だけを見れば問題行動として捉えてしまう。しかし、その行動によって自身の感情を表現しているのであればその力を利用して、その力の反発力において、新しい生活力に変化させていくことができれば、もともと持っている力によって、生活を営むことができるという考え方ができる。このような力をエンパワメントというが、人とその人の環境との間の関係に焦点をあて、環境を改善する力を高め、自分の生活をコントロールし自己決定できるように

支援し、その力が社会で適応できるよう生活を整えていく支援も必要と考えられる。

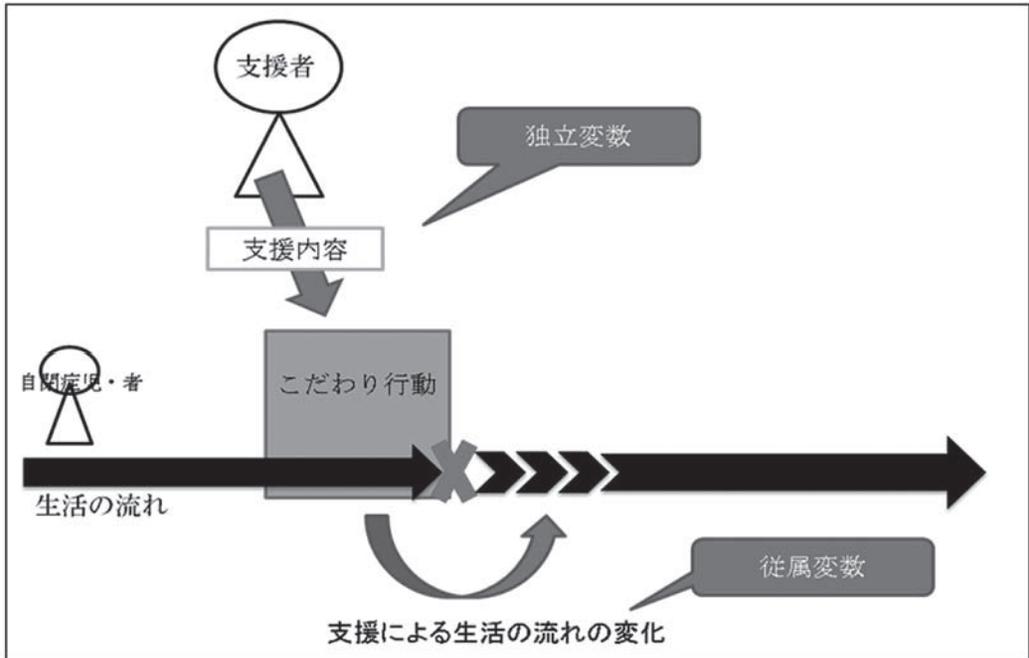


図1 こだわり行動への支援

以上のことから今までの研究ではこだわり行動の行動分析や自閉症児・者の行動を直していく、変えていく支援を求めていく研究、こだわり行動をなくしていくための支援研究というような、こだわり行動の問題点や行動変化を行う手段の検討、こだわり行動を違う行動に変えていくという“自閉症のこだわり行動”に焦点を当てた研究が多くなされている。また、こだわり行動への支援に関する研究もなされているが、将来につながる生活支援を福祉の視点で具体的に述べている研究は見当たらない。

そのため本研究では、図1のように、支援内容を独立変数、こだわり行動をした時とその後の生活の状態を従属変数とおき、支援内容を考察することで、生活の流れにどのような変化が見られるのかを明らかにすることができるのではないかとこのところに注目をした。自閉症のこだわり行動に対する支援者の支援内容、こだわり行動への支援に関するエピソードの分析、こだわり行動からくる生活の困難性の3点に焦点を当て、こだわり行動による生活の困難性を支援者の支援内容から検討していく。

2、研究の目的

自閉症のこだわり行動への福祉専門職及び母親の支援行動に着目し、その支援内容が自閉症

児・者の生活及び生活行動にどのように影響を与えているのかを、エピソード分析によって明らかにし、支援のあり方について検討することを目的とする。

3、研究方法

(1) 調査対象者

本調査対象者は、2010年11月から12月上旬にA県およびB県において自閉症児・者の生活支援にあたっている専門職員（施設職員）または家族に電話において調査依頼を行った。調査協力の承諾を得た施設の専門職員2名、家族2名を対象とし、それぞれの要望に合わせてながら、日時及び場所を設定し、インタビュー調査を行った。

(2) 調査方法

調査方法は、福祉専門職、家族それぞれに対して、「こだわり行動」、「支援（介入）内容」、「支援の結果」「支援後の自閉症児・者の生活への影響」について直接面接法により調査を実施した。

また、得られた結果から自閉症児・者支援に必要な支援を検討し、自閉症児・者のこだわり行動の支援内容について考察を行ったうえで、問題、課題を明らかにした。

(3) 調査手順

こだわり行動の支援に関する質問紙を作成しT都に在住する人を対象とし、パイロットスタディを行った。このパイロットスタディから出てきた、問題点、改善点を整理した後、A県及びB県の専門職2名、家族2名を対象に本調査を行った。

本研究は、半構造化を用いて、作成した質問用紙を使用しインタビューを行ったものを、さらに文章化したものを客観的視点によるキーワード分析を行った。そこから各事例より、専門職、家族が日常生活において支援を行う実態をもとに支援者の支援傾向として明らかになった問題点を抽出した。こだわり行動の支援に必要な支援内容について具体的に検討を行った。

(4) 調査時期

本調査の時期、場所は自閉症児・者の生活支援を現在行っているA県の自閉症児家族1名、B県の施設職員2名、自閉症児・者家族1名を対象とし、2010年12月13日～2011年1月5日にかけて調査を実施した。1回の調査で1時間半から2時間半の時間を要した。

(5) 調査項目の設定

<パイロットスタディ>

B県に在住する2名にパイロットスタディを行った。この調査により次のことが明らかになった。このことから問題点を再度確認し、質問用紙を再構造、再作成した。

- ①こだわり行動について多くの質問があり、支援内容の話が出にくいのではないか、と指摘を受け支援について具体的に話が出されるような質問に改善した。
- ②質問内容が重なっている部分があったため、分かりやすいよう内容を整えた。

<本調査>

パイロットスタディを行った結果、以下のような構造化に沿った質問用紙とした。

- 1, こだわり行動の内容, 支援（介入）内容・方法, 支援の結果（生活への影響を踏まえて）, 支援による自閉症児・者の生活への影響に、分類化した。
- 2, 対象者を大きく専門職者と家族の2種類の統柄に設定をした。

（6）調査項目

質問用紙の質問項目は、1 こだわり行動, 2 支援内容, 3 支援結果, 4 生活への影響, 5 その他（計15項目）からなる。

（7）「生活困難性」の定義

本研究での生活困難性とは、「こだわり行動によって生活の流れが止まり、そこで次の行動（生活）に移ることができない状態」のことを示している。

4、結果・考察

（1）事例検討（エピソード分析）

自閉症児・者の支援にあたっている家族、施設専門職員に話を聞き、こだわり行動に対する支援の中でどのような支援をし、その支援によってどのような結果が出ているのか、インタビューを行った。結果では、自閉症児・者が支援の介入によって、どのように行動に変化が見られているのか、また支援によって生活にどのような影響が表れてきているのかについて明らかにし、支援の具体的な介入方法の考察を行った。

表1 専門職の支援内容の特徴

ケース	支援者	支援内容	支援結果（生活困難点）
①	専門職	<u>こだわり行動から意識を遠ざけてほしい気持ちから</u> 、こだわっている物を取り上げる支援	生活の流れがとまる 自傷行為を始めてしまう

⑤	専門職	繰り返し目的の場所へ行くこと の理由を <u>支援者同士が曖昧 のまま支援にあたる</u> こだわりすぎないように声かけ を行い、見守る支援	生活止まる 声かけをしても、行動をする →支援してもしなくても、こだわり行 動を起こしている
	母親	何をしたいのか、 <u>背後からじ っくり様子をうかがう支援</u>	生活止まる こだわり行動継続

表2より福祉専門職と母親の支援の違い、こだわり行動の捉え方の違いが見えてくる。福祉専門職は、本人の意思を尊重しながらの支援が基本となるため、支援を確定する難しさがあるのではないかと考える。エピソードより、「こだわり行動を続けても良いと思っているが、家族からの意向もあるし、逆にこだわりすぎてしまうのもどうかと思うし…」とあり、専門職という立場上の支援の不安定さが読み取れる。それによりどうしても、“支援のしやすさ”に意思が向いてしまう場合もあるのではないかと推測できる。

また母親は、母親として子どもを教育させる支援、その場を回避させるための強制力を利用した支援がうかがえる。

福祉専門職と母親のこだわり行動、自閉症児・者をどのように捉えているのかの違いが見えるケースである。

表3 母親による支援

ケース	支援者	支援内容	支援結果（生活困難点）
⑥	母親	どうしてドアを気にするのか を考えている 様子をうかがう支援	生活止まる 行動継続
⑦	母親	見守る支援 又は <u>違う視点を利用し、こだわり 行動を生活で活かせるように 支援をする</u>	母親は「寝るときは消す」ということ だけ注意をしてきた。 → <u>こだわり行動=できる行動として とらえている</u> →母親を試す行為となってきた のか（学習している）
⑧	母親	第三者（医師）のアドバイスを 受けて、見守るという支援	医者（専門職のアドバイス）を 受けてそのままにしている
⑨	母親	いつも観察をし、何か違うな と思った時だけ声をかけ様子 をうかがう	生活止まる 行動継続

表3では、生活の困難性を生活が流れるように切り替えたケースである。つまりこだわり行動から意識を遠ざける支援ではなく、こだわり行動を本人の“できる行動”として捉え、生活

に活かせるよう意識を向かせている。

今回の調査では、福祉専門職のエピソードからは示されなかった支援である。このことから、福祉専門職の支援は本人の特性を把握しきれていない部分がある、又は支援の負担を優先し、“いつものこだわり行動だから”と安易にこだわり行動を捉えていることがあるのではないだろうか。

これは母親だからできた支援ということではなく、こだわり行動を理解し、その行動が生活にどのような影響を与えているのかを理解しようと意識することで、改善できる点ではないかと考える。

表 4 合理性のある配慮について

ケース	支援者	支援内容	支援結果（生活困難点）
⑩	専門職	一緒に取り組む支援	否定もなく、行動に同調する支援をすることで落ち着く。 → <u>その場だけの対処</u> 環境整備不十分
⑪	専門職	<u>こだわり行動自体に問題があるという考えから、こだわり行動を否定し、支援者側の考えを伝えている</u> （声かけ・押さえつけ）	・自傷行為 ・3日間何も口にしない →現在もフラッシュバック出ている

この表は、自閉症児・者への配慮について考えさせられる事例であった。

ケース⑩は、こだわりを求められた支援者とその行動に同調している支援内容である。これは一見すると本人を尊重した支援と推測する事が出来るが、本当にこだわり行動に焦点をあて、生活全体を見て支援しているのだろうか。その場限りの対応となっているだけで、環境整備などを怠っているのではないか、ということが考えられる。

ケース⑪は、こだわり行動を完全に否定した支援であり、支援者側の役割を果たすための支援になっていると考えられる。その結果、自傷行為、食事拒否が起きてしまっている。そして、こだわり行動を否定され無理やり嫌なことを押し付けられた苦しみのフラッシュバックが現在も出ているということである。こだわり行動を問題と捉えたために、自閉症児・者の生活に困難な影響が出てしまったケースである。

⑩、⑪のケースから、自閉症者への支援の合理性が配慮されていなくても、生活困難性に着目した支援はされていないことが明らかになった。

5、結論

本研究のテーマである「こだわり行動」は、健常者や他の障害者にも現れることのある行動

であり、こだわりを持っているためその人の個性として捉えられる場合もある。しかし、自閉症で用いられるこだわり行動は思考や意味合いの違い、そして生活に大きな影響、困難性を与えてしまうこと、自閉症児・者の生命にまでかかわる問題行動にまで発展してしまう大きな障壁となっている。

福祉的視点に立てば、そのこだわり行動から見られる、「生活上の困難性」に着目し、その困難性の解決すべき支援を考えていかなければいけない。特に、こだわり行動における生活上の困難性は、生活の流れを止める社会的に不適応な行動がみられる。そこで専門職者としてそのこだわり行動によって自閉症児・者に何が起きているのかを理解しなければいけない。そしてどこで生活が止まり、その原因となっているものは何かを追究していかなければ、こだわり行動の支援を行っているとは言えないだろう。

今回、自閉症のこだわり行動への支援者の支援行動に着目し、その支援行動が利用者の生活及び生活行動にどのように影響を与えているのかを、エピソード分析によって明らかにすることを目的とし、支援者がどのような支援を展開していくことが必要なのかを言及した。

そして、以上のこだわり行動の事例を踏まえて、どのような支援を行い、その支援が自閉症児・者自身にそして自閉症児・者の生活にどのような影響を及ぼしているのかの分析を行ってきた。

同じこだわり行動でも、支援者、環境、状況、前後の生活状況、感情などによってこだわり行動からどのような困難性が表れてくるのか。また、何が異なっているかがエピソードから明らかに見えてくる。そして支援者の支援内容として自閉症、こだわり行動の知識、こだわり行動を支援する意味、生活支援をする意識など、支援者の考えによる介入方法は、自閉症児・者にどれだけの影響を及ぼしているのかその現実が明らかになってきた。

（1）こだわり行動の支援における課題3つの視点より

これらの事例から次の3点について再度検討する必要がある。①「“こだわり行動” それに対して“支援する” という繰り返しによる対処的支援の傾向、②支援における強制的な介入と利用者の本位の捉え方、③誰のための支援なのか、この3つの視点よりこだわり行動の支援における課題を言及していく。

まず、「“こだわり行動” それに対して“支援する” という繰り返しによる対処的支援の傾向について、どうとらえるのかということである。上記の事例はすべて異なる内容ではあるが、“こだわり行動”、“支援する” という基本的な構造は同じであり、それがずっと繰り返し行われていくことである。どのようなきっかけで支援の終わりがあるか見えにくい状況は支援者にとって不安を高める。たとえば、“なぜ、そこに自分が求めている赤いセーターではなく、青いセーターかしないのか” その状況に上手く対応できない自閉症児・者に対して支援者は介入していかなければ、彼らは生活しにくい状況が永遠に続く。その支援にも制限を持たせる必要も出てくる。

しかしその障害がある生活の中にも、生活に活かせる行動はあり、その行動を本人が納得できる方法で、その人の力として発揮させられるようにする支援が求められる。その対処的な終わりの見えにくい支援の傾向は、ただ困難なことだけを意味するのではなく、その自閉症児・者がこれはできないが、こんなことができるのだと発見しやすい状況であることを理解していなければいけない。

次に、家族支援において見られる支援における強制的な介入とそこで評価されやすい利用者の本位をどう考えて支援をしていくかという点を考えなければいけない。

たとえば母親が「テレビ消しなさい」と何度も怒りを表しながら、テレビをつけるこだわり行動に対して介入していた場合、自閉症者は“母親は怖いからテレビを消さなきゃ”ということの思い、消すようになる。それはこだわりたい気持ちを上回る衝撃な外的刺激となっていると考えられる。しかしそれを生活支援ととらえる場合、そのテレビを消すという行動に“自閉症児・者の本位”とした合理的な配慮はどこにあるのかということが議論されてくる点である。

福祉の現場では、施設利用者が望む支援、その人の需要に合わせて支援を実施していくことが求められており、支援者の強制的な介入は合理的な支援とは捉えられていない。しかし母親や家族からの支援は身内だからこそできる支援であり、その介入方法を否定することはできない。

しかし、施設の専門職者は社会で生活する一人の人間として利用者と同じくすることが必要になる。どうすれば納得してもらえる支援になるか、どうしたらその人の要求と生活に沿った支援内容になるのかを常に考えて支援に入ることが重要と考える。

3つ目として、だれのための支援なのかという点であるが、生活困難を感じているのは、支援者ではなく本人であることを忘れてはいけない。支援の基本的な考えではあるが、支援者が支援しやすいように自閉症児・者の基準を動かすような支援は、生活支援を行っているとはいえない。

(2) 家族と専門職の支援の特徴

家族と施設専門職の支援内容にはどのような特徴があるのかをみることができ、事例の支援内容だけではなく、その両者間の違いには様々な要素があることが明らかになった。

まず家族は、どのように自分の子どもと関わりをもてばいいのか、どのように育てていけばいいのか悩んでいる時に、出会う専門家によるアドバイスが家族に大きく影響していることが見受けられる。たとえば、母親エピソードから「Hの病院の先生に心理の先生を紹介してもらった。その先生から“一番考えないといけないのは、自傷しないで生活していくことを考えなければいけない。”と言われた。しかし、いずれは私と離れて生活していく。家の中で生活できる・安定して生活できる、その二つの目的が必要なのかなと思う。」や「Tが幼児期にB施設に幼児外来が始まった。そこで今の主治医に出会い、TEACCHを教わった。その支援で彼の生活が整っていったという事はすごく大きなこと。なぜそういうこと（子どもが）をするのかを理解しながら見ることができるようになった。」「療育外来では、“今度はお母さんが主体となっ

てやる番だ。”と言われた。指導してくれる先生がいる整った生活をしていくことが大事だと思う。」とある。このことから、専門家の言葉がけや支援は、母親自身の支援に自信をもたらし、子どもの生活の基礎となる考え方となっていく、とても重要な出会いである。しかし、そこで受けた助言に意識が傾き、長期的生活の視点が欠けている部分が出てきているようにも考えられる。

また、そこで身に付けた経験を母親や家族は必死に活かし、自分流の支援を確立していく傾向がうかがえる。母親の「ある意味最初は親がこだわっていたかもしれない。でもこだわったことによって彼の生活力、認知力が上がれば、ある程度こだわる必要はあるのかなと感じた。」ということから、母親の支援が子どものこだわり行動や生活に大きな影響力を与え、自分が何とかしなければいけないという焦り、結果を急いでいる様子が見え始める。自閉症児・者の生活の中で、「自傷行為が出ないことだけ」気をつけなければいけないという考えにより、そのために自閉症児・者ができる行動、生活に活かせる行動を見落としてしまっているのではないかと考えられる。日々繰り返される生活の困難性に対して、親は否定し、長期的視点が持てなくなる。それは家族による障害受容や将来の展望、愛情過多が大きく影響してくると考えられる。

次に施設専門職者は、専門の違いによって認識や生活の価値観が違うため各々の課題が見えている。

自閉症児・者に直接支援にあたる施設の専門職員は、自閉症のこだわりから出てくる困難性を理解しているか、していないかの差が支援に表れている。たとえば、本人のこだわりに含まれている意味を排除して“食事をすること”を優先的に考える支援と、“こだわりと生活”の両方に視点を置く介入内容の違い。また違う事例では、なぜ食べないのかを考えず、“食べないといけない”ということだけを主張し続けた支援と、どこに原因があるのか生活全体から検討しながら支援を行う、という支援への意識の違いも明らかになった。

また福祉専門職員の「支援員によってこだわり行動に対して否定をする。それが自傷につながったりすることがある。」というエピソードから、施設内のさまざまな考え方をもった支援者同士での、共通の理解、統一された支援の重要さがうかがえた。また、「統一支援といってもただこの時間にこれをするという統一ではなく、こだわり行動に夢中になって次の行動に移れない時でも、介入して次の行動に必ず移行してもらえるように促すという決まりごとを決める必要がある（それぞれの支援の工夫は別として）」と話している。このように、専門職者は経験、技術、知識に違いがあるため、基本的にどのように生活リズムを作って行くかの底辺の部分は、支援者通しで統一していかなければいけない。その支援のゆがみに振り回されて混乱するのは自閉症児・者であり、誰のために支援を行っているのかを、専門職員は忘れてはいけない。こだわり行動の困難性を改善させようということだけではなく、こだわり行動の見方を変えることで、自閉症児・者の生活力を高める可能性も推測できるため、支援内容はとても重要になってくる。

職業的支援になればもちろん、第3者にしかできないソーシャルワーク的な視点が求められる

る。ソーシャルワークの視点で考えていく支援，エンパワメント力，合理的な配慮による支援，自立の視点，ICFの考えなども理解していく必要がある。

(3) 今後のこだわり行動の支援の課題

今回の支援に関しては，家族と施設専門職の分析を行ってきたが，自閉症対象者による違い，他の支援者，生活に間接的にかかわる支援関係者，生活環境，場所における特徴など細かく設定せずに，大きな枠組みで研究を行った。また自閉症児・者のこだわり行動が始まった時期や年齢に焦点は当てていない。

こだわり行動，生活支援とは何かを細かく分析し，自閉症の支援について研究を進めていくことが必要と考えられる。

また自閉症児・者一人に対して，支援を行っている全ての人の意見を聞くことができなかったため，生活の問題点，支援の課題をすべて明らかにすることはできていない。分析を行うことができていないところもある。自閉症の生活支援について再検討していくことを今後の課題としたい。

引用文献

- 石井哲夫1993年「自閉症とこだわり行動」東京書籍21-24, 26-31, 52-55, 69, 71, 82-84, 114-115, 126-134, 181
- 金井孝明1997年「青年期自閉症者の「不適応行動」とコミュニケーション能力に関する分析—養護学校の卒業生の実態把握にかんするアンケート結果から—」
- 川瀬泰治2007年「自閉症者の青年期以降における社会性の発達」別府大学紀要 第48号
- 中根昇1978年「自閉症研究」金剛出版 24-26, 41, 48, 51 - 52, 76, 213-228
- 全国自閉症者施設協議会「自閉症者施設実態調査2006 自閉症者施設のサービス評価基準～会員施設による自己評価調査～ 報告書

参考文献

- 秋山智久2007年「社会福祉専門職の研究」社会福祉研究選書③ ミネルヴァ書房p241-251
- 藤田綾子「行動障害を伴う自閉症生徒の行動改善に向けた機能的アプローチ—機能分析の理論と手法を用いた後期中等教育段階における問題行動改善への支援—」教育実践研究 第19集
- 服巻繁ら2000年「こだわり活動を利用した 自閉症青年の行動障害の改善—機能アセスメントに基づく代替行動の形成—」特殊教育学研究
- 後藤栄一1995年「自閉症施設の現状と今後—あすなろ学園の現状を見つめながら—」ZSZ療育の窓 第92号 全国心身障害児福祉団
- 編者アン・アルヴァレス スーザン・リード 監訳者 倉光修2006年「自閉症とパーソナリティ」株式会社 創元社
- 石川肇「強度行動障害を示す重度知的障害者の行動改善に関する考察」
- 石川肇「障害者自立支援法と行動障害」四條畷学園短期大学
- 岩田香織・高畑裕子2004年「知的障害児施設におけるTEACCHメソッド導入について」静岡県立大学短期大学部研究紀要 第18-W号

- 門田光司ら 2003年「知的障害・自閉症の方へのケアマネジメント入門 地域生活を支援するために」
中央法規 21, 86, 89, 92-95
- 勝井陽子「強度行動障害を捉える視点についての一考察」
- 小林幸代ら 2010年「自閉症児への支援技法である構造化における評価の重要性」
川崎医療福祉学会誌 Vol.19 No.2 p277-283
- 厚生労働科学研究飯田班 2005年「衝動性の強い強度行動障害をみせる方への支援の在り方」
- 牧亮太 2008年「からかい行動に関する研究の動向と課題」 広島大学大学院教育学研究科紀要
第57号
- 丸山尚 1995年「行動障害への対応—通所施設の立場から—」 ZSZ療育の窓第92号 全国心身障害児
福祉団
- M.ラター, E.ショブラー編著「自閉症 その概念と治療に関する再検討」黎明書房 11-13,414-416,
415
- 長富義隆 1998年「強度行動障害の軽減に向けての取り組み」セーナー苑「やまびこの丘」
- 中根昇 1999年「精神遅滞児にみる行動障害の対応発達障害の臨床」金剛出版
- 日本自閉症スペクトラム学会編 2005年
「自閉症スペクトラム児・者の理解と支援 —医療・教育・福祉・心理・アセスメントの基礎知識
—」教育出版 2, 7, 126-133, 134-142, 222, 228 - 227, 135, 221
- 落合みどり 2003年「ADHD児・高次脳自閉症児における社会的困難性の特徴と教育」自閉症と
ADHDの子どもたちへの教育支援とアセスメント
- 奥田健次 2001年「わが国における強度行動障害処遇の現状と課題」吉備国際大学特殊教育学研究
パトリシア・ハウリン 2000年「自閉症・成人期に向けての準備：能力の高い自閉症の人を中心に」
ブドウ社
- 作見泰徳「自閉症児の社会性を高めるための教育的支援について—太田 stage 評価による認知発達治
療をもとに社会性の伸長を図る—」
- 佐々木正美 2004年「青年期自閉症へのサポート 青年・成人期の TEACCH 実践」岩崎学術出版 33,
66, 70 - 77, 85-89, 113 - 117, 128
- 千住敦 2002年「自閉症児におけるまなざしからの心の読み取り——心の心理と言語能力・一般的知
識・障害程度との関連」心理学研究第73巻第1号
- 諏訪さゆり 2007年「ICFを活かしたケアプラン実践ガイド」日総研出版 p18 - 24, 111
「障害者問題研究」vol.34 No.4 2007年 全国障害者問題研究会
- 高橋幸三郎ら 2004年「障害者家族の生活困難に関する研究」東京家政学院大学紀要 第44号
- 鶴田一郎「自閉症スペクトラムの臨床心理」福朗出版 23 - 25, 58-62
- 氏家武「発達障害、特に自閉症に伴う行動障害—その理解と対応—」北海道こども心療内科氏家医院
WHOの国際疾病分類第10版（ICD-10）
- 山田佐登留（1997）「思春期における行動異常の成り立ち」自閉症治療スペクトラム 金剛出版
- 山崎昇資、栗田広 1987年「自閉症の研究と展望」東京大学出版会 53-58、
- 箭内吉文ら 2009年「行動上の問題を示す知的障害を伴う自閉症児への指導に関する一考察」福島大
学総合教育センター紀要第7号
- 全国自閉症者施設協議会 平成18年「40歳を超えた自閉症の人たちの現状調査」
財団法人三菱財団助成による調査研究報告書

(2011.10.5 受稿, 2011.10.20 受理)